「関東軍」「支那派遣軍」の住民への残虐行為を風化させてはいけない

《真の日中友好のために》

中島五郎（不戦兵士・市民の会　理事）

一九四五年八月一五日の日本の敗戦から四ヵ月後の一二月八日、私の所属する中隊が警備していた山東省の塔耳保駅は、八路軍の夜襲を受けて壊滅しました。そのとき私は左腕と右膝に被弾して身動きできず、出血多量で一命を落とす間際に八路軍の幹部に助け出され、適切な手当てを受け、その後、野戦病院で四ヵ月の治療を受けたお陰で九〇歳の今日があります（詳細は『不戦』一七一号（二〇一四年秋季号）に掲載）。

『私はあの体験を通して、中国共産党の皆さんが指導部から現場まで一貫して国際感覚を身につけ、国際条約を遵守していたことに対し、深甚なる敬意を表するものです。

それに対して日本軍の行為が、全く国際条約を無視した野蛮で残虐非道な所業が、住民に対して加えられてきたかを知っているものの一人として、誠に慙愧（ざんき）の念に耐えません。

日本政府がこの非道を認め、反省と謝罪を表明して日中の国交が回復しました。経済文化の交流が進み、善隣友好の道のみが、お互いの生きる道だと思っておりましたが、近年、戦時中の日本軍の加害行為に対する反省を、自虐史観だというとんでもない論調がまかり出て、しかも現政権、安部首相の出現以来、この風潮が更に強まっている状態になっております。この赦（ゆる）しがたい動向を放置してはいけないと言う決意を高めて、不戦兵士・市民の会の「語り部」活動に熱を入れるようになりました。身体の動く限り、この戦時中の日本軍の行為を語り継いでいこうと思っております。

己の過ちを認めてはじめて、相手方と真の友好の握手はできるものです。私は日中の善隣友好のみが日本経済発展の道だと確信しております。この道に反する戦前感覚の言動は、日本の前途を危うくするものと思っております』。

以上は、二〇一五年七月七日に中国大使館で行われた「七・七盧溝橋事件78周年記念集会」で、不戦兵士・市

民の会を代表して行った私の挨拶の主な内容です。ここで強調している「語り部」活動について、その概略を列記させていただきます。

この一年間の「語り部」活動

＊二〇一四年八月二日、毎日新聞群馬版全5段半頁に「七〇年年目の平和、元兵士たちの記憶（企画一〇回の二回目）」／「戦場体験伝えるのが使命　日本軍の仕打ち介抱してくれた八路軍」掲載。

＊二〇一四年八月一五日、日中友好協会前橋支部主催の「平和のための戦争展」開催記念講演会で「私の戦争体験」を語る。参加者五〇名。

＊二〇一四年一〇月、ミニコミ誌「秘密法廃止を求める高崎市民の会」B4版五〇〇部に、「加害責任を認めて日中友好を前進させよう」　元北支派遣軍　元陸軍兵長中島五郎「憂慮すべき日中の国民感情　反省と謝罪について　平頂山事件　村民皆殺し　南京事件　各部隊競って銃撃　慰安所　軍が設置　日本鬼子の実相」

＊二〇一四年一一月二九日、山形県南陽市で「子育て、暮らしを考える交流集会（第13回）」。記念講演「戦争の真実、平和の大切さを語り伝える」（参加者八〇名）。

＊二〇一五年二月一一日、群馬テレビ「ニュースジャスト6」の戦後七〇周年特集　第1回平和の誓い　元兵士　中島五郎（九〇歳）「中国大陸の戦場体験」。

＊二〇一五年六月一七日、高崎倫理法人会モーニングセミナーで「私の戦争体験Ⅰ・Ⅱ」（参加者五〇名）

＊二〇一五年七月七日、中国中央テレビの録画撮り　放映七月七日。

＊二〇一五年七月七日、「七・七盧溝橋事件記念集会（中国大使館）」で、不戦兵士・市民の会を代表して挨拶。

＊二〇一五年七月一四日、暁光高校（大阪府河内長野市）で文化祭実行委員会の講演「戦後七〇年、次代をになう高校生として戦争の真実を見つめよう」（参加者・実行委員生徒男女六〇名・教師二〇名）。

以上がこの一年間私が行ってきた語り部活動の内容です。これ等の活動から幾つかの感想と今後の対応を考えたいと思います。

いくつかの感想と今後の対応

先ずこの十五年戦争で元満州の関東軍、並びに全中国に派遣されて帰国した元日本兵は、二三〇万以上と推定されます。この人たちの口コミと、報道等で中国での日本軍の所業が「随分悪いことをしてきたようだ」という風評になっておりますが、国民はその具体的な内容については余り知らないのが実情です。

復員した日本兵もまた「俺たちがやってきたことは、

とても口に出すことはできない」「それ以上のことは聴かないでくれ」「俺はもうすっかり忘れたよ」という逃げ口上が多い中で、「俺は少なくとも二〇〇名は殺（や）っただろうな、ただ自分の部下は一人も死なせはしなかった」と嘯（うそぶ）いていた老兵もいましたが、加害の実態がうわさ程度にしか大衆化されず、大方の元兵士はかたくなに口をつぐんできたのが実態のようで、それが戦後の国民意識に反映していると思われます。

然しまだ三〇万近くの元兵士が健在のはずです、腹の中をぶち明けて、悪かったことは反省し謝罪する気持ちで、余生を子孫のために真実を伝え残してくれるよう期待します。とにかく日本の国民の多くに、中国における日本兵の加害行為の中身について、もっと知ってもらいたいということです。

日中友好協会前橋支部の記念講演のとき、五〇名の参加者に「平頂山事件を知っていますか」と質問、手を挙げた方が一五名ぐらいでした。ことの一部始終を話したところ、本当にビックリしたようで、この平頂山の虐殺行為が、南京事件や三光作戦の原点であることを明らかにして、初めて加害の実態を心に刻む事が出来たようでした。

慰安婦問題も、一番手っ取り早い説明は「中国戦線を経験した老兵に聞いてくれ」と言うのが一番の説得力ある説明ではなかろうか。

いま、「日本鬼子」と言う映画のDVDが出回っておりますが、これはありのままの証言記録です。話題にしたいものです。

私は今でこそ九〇歳を超えた老兵ですが、当時は現役の初年兵でした、わずか一〇ヵ月の軍暦で、その上、戦闘経験は塔耳保の夜間戦闘が最初で最後、戦争体験といえるほどの兵士ではありませんでした。

そんな未熟な老兵に語り部が務まったのは、姫田光義（撫順の奇蹟を受け継ぐ会代表）先生の著作集で、南京攻略戦とそれに続く掃討作戦の全貌を知ったこと。『平頂山事件とは何だったのか』という平頂山事件訴訟弁護団の訴訟記録（高文研発行）から、その実態の把握ができたこと。さらに本の泉社から発行された大庭忠男さんの『戦後、戦死者五万人のなぞをとく』という本で、支那派遣軍総司令官・岡村寧次と蔣介石総統との闇の関係で、戦後の戦闘の実相が解明され、語り部としての内容の充実に役立ったことを、敬意をもって記すものです。

「彼らは声なき声で、己の死に様を告げてくれるような気がした……」

（著者）

著　井出亀三郎

発行（株）本の泉社

定価 1000 円（税込）